入学前教育の成果と課題
－S 大学における入学前教育の事例をもとに－

Achievements and Challenges of Pre-entrance Education:
Based on the case of Pre-entrance Education at S University

小川 勤*　陳 那森**　佐藤 広志**　中嶌 康二***　山下 泰生**
Tsutomu OGAWA　Nasen CHEN　Hiroshi SATO　Koji NAKAJIMA　Yasuo YAMASHITA

抄　録

2020 年度から「国境を越えた「仮想反転授業」による留学前教育に関する実証研究」をスタートさせた。この研究を推進するための知見を得るために、中部地方の S 大学における入学前教育関連データ（2018～2020 年度）の分析を行った。その結果、いずれの年においても、入学前教育の実施前と実施後でのテスト（プレおよびアフターのテスト）結果は有意差が認められた。これらの結果から、前述の実証研究の推進にあたり、入学前教育がどのような効果があるかを考えるとともに、課題についても併せて考察した。

1　はじめに

私立大学では、半分以上の入学生が学力検査を課さない推薦入試や AO（以下、総合型選抜）入試で入学してくる実態がある。一般入試との大きな違いは、合格決定時期が早いということである。大学入試センター試験が目前に迫る中、総合型選抜入試や推薦入試で早々と合格した高校生たちは、「大学に入学するまで、学力が低下してしまうのではないか」という懸念がある。一方、大学側としても入学までの隙間となる時間を使って、将来の大学教育に対応するための教育、すなわち、高校までの苦手科目や未履修科目の補填、入学後に必要となる専門知識の習得、例えば、将来の大学でのレポート課題作成に向け、日本語表現能力の育成などに貢献する入学前準備教育を施す必要性を感じている。実際、入学前準備教育を実施する大学が近年増えている。

そこで、今回、中部地方にあるＳ大学での入学前教育を研究対象として取り上げ、入学前教育の課題の提出（達成）率、入学前教育の実施前後で実施したテスト結果から入学前教育の有効性の検証および入学前教育の課題について分析を行った。

2　S 大学における入学前教育

2.1　導入の経緯

S 大学では、正式には 2010 年度から入学前教育を導入した。最近まで事務部門が中心となり、入学前教育を請け負った外部業者（東進ハイスクールおよび株式会社ナガセ）と連携し入学前教育を実施してきた。このため、一部の教員以外はその実態を把握していなかった。最近になり大学自己点検評価や教学 IR の一環として入学者の入学前学力の実態把握をする必要性が生じた。このため入学前教育の調査を行った結果、10 年前からすでに実施していたことが明らかになった。ただし、S 大学には小学校教員養成を目指す学部があるため、当該学部では入学前の春休み期間中に希望者に対してピアノの理論と実技を教えるピアノレッスン講座を開講している。これ以外に入学前教育といえる取り組みはこれまで実施してこなかった。

＊　静岡福祉大学子ども学部　教育総合研究所共同研究員
＊＊　関西国際大学経営学部　教育総合研究所学内研究員
＊＊＊　関西国際大学社会学部　教育総合研究所学内研究員

Ｓ大学ではこれまでに他大学がすでに実施しているような総合型選抜入試で入学が決定した学生に対し、読んでおいてほしい図書を指定しレポートを書いてもらい、コメントをつけて返却する等の入学前教育を実施すべきではないかという議論があった。しかし、レポートの作問・採点・コメント付与といった作業を学年末の多忙な時期に教員に課すことに対して抵抗感があったため、外部業者に委託するという現在の入学前教育制度になった。

2.2　Ｓ大学における入学前教育プログラムの概要

Ｓ大学における入学前教育プログラムは、東進ハイスクールと株式会社ナガセが共同で開発した教育プログラムを利用している。

当該入学前教育プログラムは以下のような趣旨および受講の枠組みで実施されている。

2.2.1　入学前導入趣旨

・大学での授業では専門的かつ高度の内容を含んでいるため、高校までの基礎学力を修得できていることが求められる。
・入学までに大学の授業を理解するために必要な「読む力」「書く力」「コミュニケーション力」を身に付けておくことが大切である。
・大学での学びにスムーズに移行できるようにするために「入学前準備教育」が必要である。
・DVD 映像教材をもとに自宅で学習し、課題を提出して理解度を高めていく。
・ここで学ぶ内容は大学でのあらゆる科目の学習の基礎となるだけでなく、社会に出て活躍する上でも必要不可欠なものとなる。
・S 大学では入学前準備教育の受講は強制ではないが、当該講座を受講して基礎学力を万全なものにして、期待と意欲を高めて 4 月の入学式を迎えて欲しいと考えている。

2.2.2　受講の枠組み

受講方法は以下のとおりである。
①学習は自宅で行う。
②自宅でテキストと講義用ＤＶＤを用いて学習し、課題を行う。
③答案は郵送して採点してもらい、返却された答案と DVD で復習を行う。

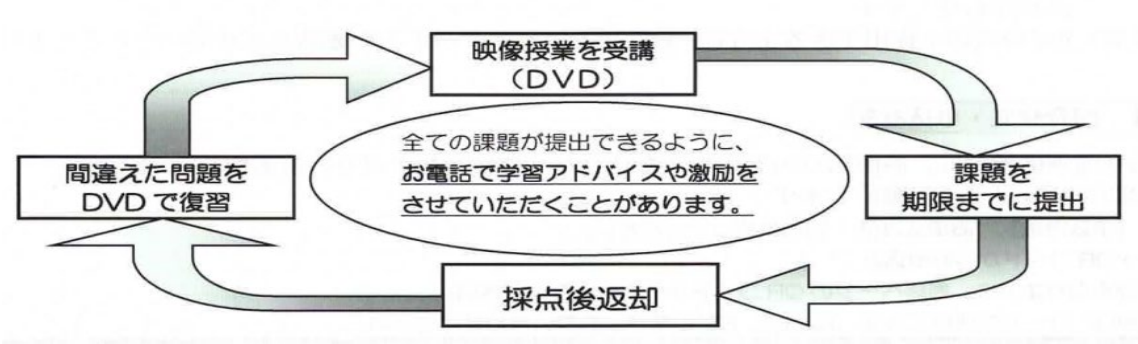

図１　受講の枠組み

2.2.3　DVD 講義のメリット

①自分の予定に合わせて、都合の良いときに学習できる。
②わからない箇所を何度でも繰り返し受講でき、苦手な分野を確実に克服することができる。
③サポートシステムとしてｗｅｂ受講（スマフォやパソコンでの受講）にも対応している。

2.2.4　申込みから受講までの流れ

申し込み完了　⇒　教材一式が自宅に到着（宅急便）　⇒　学習進行表したがって

課題を提出する。

2.2.5　受講内容の選択方法

Ｓ大学には２つの学部、４つの学科がある。そこで、Ｓ大学の社会福祉学部と子ども学部では以下のように内容の選択を行っている。

社会福祉学部　⇒　ＡもしくはＢから１つ選択
子ども学部　⇒　Ｃを選択

表１　受講内容による選択（学部別）

学部	区分	コース	受講料（消費税 10%込）
社会福祉学部	A	国語ミックス	19,855 円
	B	国語ミックス＋新・現代社会	29,782 円
子ども学部	C	国語ミックス	19,855 円

2.2.6　受講内容

2.2.5 の区分ＡＢＣで示した入学前準備教育のカリキュラムの概要は以下のとおりである。

①Ａ：国語ミックス　課題 10 回

・このプログラムは、「読む力」「書く力」「コミュニケーション力」などの基本的能力を鍛える教育プログラムである。
・『書き写し』・『聞き書き』『要約』などの練習を通して、入学後の授業を深く理解することや、正確なコミュニケーションを行う土台を作る。特に後半では「文章校正」や「文章パラフレーズ」、「文章の短文化」などの練習を行ったあと、難しい本を読む方法（文章要約）についてトレーニングする。
・国語における聴く力やコミュニケーションの能力は、講義理解の手助けとなるだけでなく、社会に出て活躍する上で必要である。
・提供を求められる課題の 10 回分の内容は以下の表 2 および表 3 のとおりである。

表２　教育プログラムの課題内容（ベーシック国語①）

ベーシック国語① 5 回	１．ＰＣ時代にふさわしい言葉力をつけるノートを作る。	２．言葉を自分のものにする（短文作り）	３．目の前のものを正確位に描写する。
	６．新聞の読み方　1	９．将来の夢について考える【実作】私の夢について	

表３　教育プログラムの課題内容（国語標準（要約編））

国語標準（要約編） 5 回	１．情報時代の要約術	２．論理的に考えるということ	３．複眼的に思考するための読書
	４．彼（女）が書くもう一人の自分【実作】	５．難しい本を読む方法（文章要約）	

・表 2 及び表 3 に示したベーシック国語①と国語標準の 2 つの教材を使用する。
・この 2 つの教材の内容から、特に今後の学ぶにつながる部分を上記のように指定（選択）して 10 回分の課題を設定した。

②Ｂ：国語ミックス＋新・現代世界　課題　全 16 回（国語 10 回＋新・現代世界 6 回）
・上記の国語ミックスに新・現代世界を加えたコース。
【新・現代世界について】
・日本・世界の地理と、現代の世界の枠組みの形成過程を学ぶ教育プログラム。
・社会科学系学部はもとより、大学で学ぶすべての事柄の基礎となる一般常識といえる。
・この教育プログラムでは日本・世界の地理から 20 世紀の日本・世界の歴史、政経分野順に、それぞれ全く単独に存在するではなく、相互に関連し合っていることを認識できるように授業を進める。
・新・現代世界の教材（全 12 回）から表 4 のとおり、6 回分を指定（選択）した。

表 4　新・現代世界の課題の内容

新・現代世界 6 回	１．地理①：日本の都道府県	２．地理②：世界の地域と国々Ⅰ	３．地理③：世界の地域と国々Ⅱ
	４．日本①：外交の論理	５．日本②：戦争の名称	６．世界①：20 世紀の国際関係（Ⅰ）

③Ｃ：国語ミックス　ベーシック国語＋国語標準　課題 10 回
・このプログラムは、「読む力」「書く力」「コミュニケーション力」などの基本的能力を鍛える教育プログラムである。（表５および表６参照）

・『書き写し』・『聞き書き』『要約』などの練習を通して、入学後の授業を深く理解することや、正確なコミュニケーションを行う土台を作る。特に後半では「文章校正」や「文章パラフレーズ」、「文章の短文化」などの練習を行ったあと、難しい本を読む方法（文章要約）についてトレーニングする。

表５　教育プログラムの課題内容（ベーシック国語①）

ベーシック 国語① 5 回	１．ＰＣ時代にふさわしい言葉力をつけるノートを作る。	２．言葉を自分のものにする（短文作り）	３．目の前のものを正確位に描写する。
	６．新聞の読み方　1	９．将来の夢について考える【実作】私の夢について	

表６　教育プログラムの課題内容（国語標準（要約編））

国語標準 （要約編） 5 回	１．情報時代の要約術	２．論理的に考えるということ	３．複眼的に思考するための読書
	４．彼（女）が書くもう一人の自分【実作】	５．難しい本を読む方法（文章要約）	

2.3　分析結果

2.3.1　受講数・課題の提出率・平均点の推移（子ども学部）

S 大学子ども学部における 2018 年～2020 年の 3 年間にわたる入学前教育参加数の推移と課題の提出（達成）率および課題の平均点は表 7 のとおりである。

・参加者は、11 名（2018 年度）　⇒　8 名（2019 年度）　⇒　12 名（2020 年度）と推移している。
・課題の内、「確認テスト」の提出（達成）率は、94.3%（2018 年度）　⇒　87.5%（2019 年度）　⇒　94.8%（2020 年度）と推移し、3 年間平均して 92.2%という高水準の提出（達成）率だった。
・課題の内、「課題作文」の提出（達成）率は、90.9%（2018 年度）　⇒　87.5%（2019 年度）　⇒　91.7%（2020 年度）と推移し、3 年間平均して 90.0%という高水準の提出（達成）率だった。
・ベーシック国語①の課題の全体の平均点は、84.3 点（2018 年度）　⇒　83.5 点（2019 年度）　⇒　88.0 点（2020 年度）と推移し、3 年間の平均点は 85.3 点だった。

表７　S 大学における入学前教育プログラムへの参加者、課題提出率、課題平均点の推移

2020年　4月　28日　現在

受講科目		20年 受講者数	20年 テスト枚数	20年 規定提出枚数	20年 実提出枚数	20年 提出率	20年 平均点	19年 受講者数	19年 提出率	19年 平均点	18年 受講者数	18年 提出率	18年 平均点
ベーシック国語①	確認テスト	12	8	96	91	94.8%	88.0	8	87.5%	83.5	11	94.3%	84.3
	課題作文		2	24	22	91.7%			87.5%			90.9%	
合計		12		120	113	94.2%		8	87.5%		11	93.6%	
受講者実人数		12						8			11		

2.3.2　各受講生の得点の推移（子ども学部）

・2020 年度受講生 12 名は、1 月 10 日～2 月 27 日の期間にベーシック国語①の 10 回の課題に挑戦した。
・10 個の課題の内、「国語」に関する課題が 8 回（第 1 講、第 2 講、第 3 講、第 5 講、第 6 講、第 7 講、第 8 講、第 10 講）、「作文」に関する課題が 2 回（第 4 講、第 9 講）である。
・各受講生の成績の推移は表 8 のとおりである。

【国語】
・国語の 10 課題の全体の平均点は 88 点であった。
・国語の成績は 8 回の課題 800 点満点で、80%以上（756 点～722 点）の成績だった者が 6 名、70%以上（655 点～719 点）の成績だった者が 4 名、70%未満の者が 2 名だった。

【作文】
・作文の成績評価は、50 点満点でA～D の 4 段階評価が行われた。
・作文の採点結果は 1 回目の平均が 30.8 点、2 回目の平均が 41.1 点だった
・作文の 1 回目（第 4 講：課題提出数 12 件）の評価段階値の分布は、A 段階が 2 名、B 段階が 7 名、C 段階が 3 名、D 段階が 0 名だった。
・作文の 2 回目（第 9 講：課題提出数 10 件）の評価段階値の分布は、A 段階が 2 名、B 段階が 6 名、C 段階が 2 名、D 段階が 0 名だった。

・作文２回分の課題の評価段階値の分布は、A 段階が 4 名、B 段階が 13 名、C 段階が 5 名、D 段階が 0 名だった。

表８　ベーシック国語①における「国語」及び「作文」の課題採点結果の推移（2020 年度）

2020/04/28 現在

ベーシック国語①

総受講者数　12 名

	1講	2講	3講	5講	6講	7講	8講	10講	合計
提出者数	12	12	12	12	11	11	11	10	91
提出率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	91.7%	91.7%	91.7%	83.3%	94.8%
合計得点	1122	1050	1013	1054	926	1006	932	907	8,010
平均点	93.5	87.5	84.4	87.8	84.2	91.5	84.7	90.7	88.0
満点	100	100	100	100	100	100	100	100	100

	4講	9講	
提出者数	12	10	22
提出率	100.0%	83.3%	91.7%
A	2	2	4
B	7	6	13
C	3	2	5
D	0	0	0

10	10
83.3%	83.3%
308	411
30.8	41.1
50	50

国語　ベーシック国語①　800点満点

学部	学科	受験番号	学生氏名	1講	2講	3講	5講	6講	7講	8講	10講	合計
子ども学部	子ども学科	711001		98	94	96	91	89	97	91	100	756
子ども学部	子ども学科	721017		99	90	99	98	87	95	89	93	750
子ども学部	子ども学科	726014		96	94	92	93	86	96	91	99	747
子ども学部	子ども学科	726014		99	96	89	92	84	97	86	95	738
子ども学部	子ども学科	726013		99	91	83	96	84	93	83	96	725
子ども学部	子ども学科	721001		96	96	89	91	87	89	83	91	722
子ども学部	子ども学科	721024		94	88	82	93	89	93	88	92	719
子ども学部	子ども学科	721006		98	85	79	89	66	94	82	88	681
子ども学部	子ども学科	712003		89	90	93	98	100	97	90		657
子ども学部	子ども学科	711002		96	73	80	58	88	94	80	86	655
子ども学部	子ども学科	720002		68	66	53	68	66	61	69	67	518
子ども学部	子ども学科	721028	[illegible]	90	87	78	87					342

作文　ベーシック国語①

4講	9講	プレ	アフター	点差	備考
B	B	37	50	13	
C	B	31	44	13	
A	C	39	38	−1	
B	B	27	32	5	
B	C	24	48	24	
B	A	32	39	7	
B	A	29	49	20	
B	B	34	46	12	
C					
B	B	31	35	4	
C	B	24	30	6	
A					

2.3.3　プレテストおよびアフターテストによる各受講生の成績の伸び

・入学前教育実施前のプレテストと実施後のアフターテストの結果を比較したところ、上昇した受講生は、10 名中 9 名だった。受講生の 90%以上で入学前教育を受講することにより、国語の成績の上昇が見られた。
・伸びた点数の絶対値をみると、20 点以上伸びた受講生が 2 名、10 点以上～20 点未満伸びた受講生が 3 名、10 点未満が 4 名だった。
・受講生の内、成績が下がった者は 1 名いたが、減少点数は 1 点と小幅だった。
・この結果から、入学前教育は国語能力の向上にかなり有効性が高いことが明らかになった。

2.3.4　入学前教育受講後の受講生アンケートの結果（2020 年度）

「入学前教育受講後の受講生アンケート（2020 年度実施）」より以下のことが明らかになった。（図 2 参照）

・映像授業を何で受講したかを聞いたところ「ＤＶＤプレーヤー（90%）」「パソコン（10%）」と、圧倒的にＤＶＤを利用していることが分かった。
・確認テストの出題レベルについては、「やや難しい（60%）」および「ちょうどよい（40%）」と回答している。出題の難易度レベルは適切だったと考えられる。
・受講生の内、40%が「受講してよかったと思う」と回答している。
・入学前教育を受講するのにかかった 1 週間の学習時間を聞いたところ、「２～4 時間未満（50%）」が最も多く、「４～６時間未満（20%）」、「６～８時間未満（20%）」、「０～２時間未満（10%）」という順であった。
・講師の教え方に関しては、「わかりやすい（50%）」が最も多く、「ややわかりやすい（30%）」、「普通（20%）」という順であった。

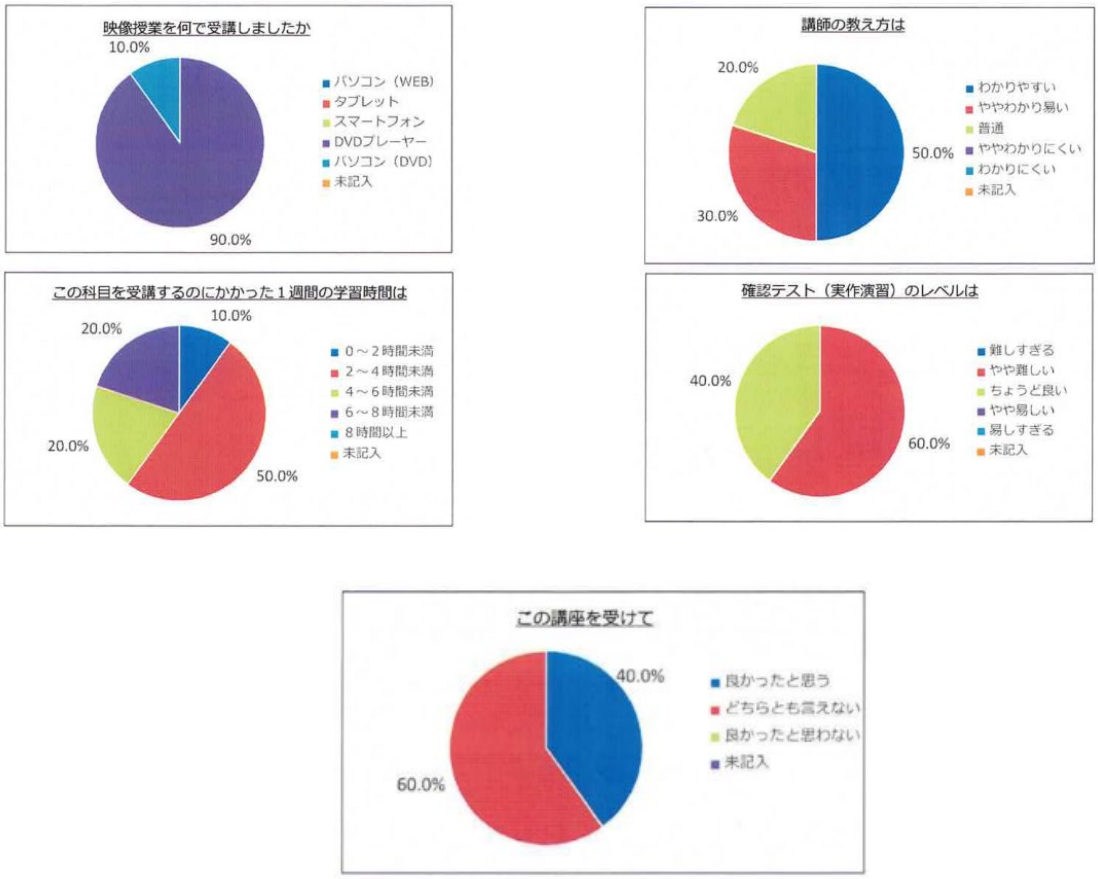

図２　入学前教育受講生に対するアンケート結果（2020 年度）

3　おわりに

本稿では、2020 年度からスタートさせた「国境を越えた「仮想反転授業」による留学前教育に関する実証研究」を推進するための知見を得るために、中部地方の S 大学における入学前教育関連データ（2018～2020 年度）の分析を行った。S 大学の入学前教育ではＤＶＤを活用し、受講者側が時間と空間に制約されずにいつでも自分の都合に合わせて学習できるなどのメリットがあることがわかった。 S 大学の入学前教育の関連データの分析結果から、「確認テスト」および「課題作文」という課題の提出（達成）率のいずれもが平均して 92.2%、90.0%という高水準の提出（達成）率を示している。また、入学前教育実施前のプレテストの点数と実施後のアフターテストの点数を比較したところ、アフターテスト段階で有意に上昇したことが明らかになった。この結果から、入学前教育は国語能力の向上にかなり有効性が高いことが明らかになった。

一方、入学前教育の課題としては、「入学までの学習習慣の維持」や「高校までの基礎学力の補強・向上」という目的だけで、入学前教育を捉えてよいのだろうかという疑問である。ここで着目したいのは、「大学での専門分野への導入」である。入学前教育とは、学力のマイナスを埋める発想を前面に出すのではなく、来るべき学習・研究の一端に誘う学習内容こそが、その意欲や目的意識を一層高めることができる。その中で、付随する不足する学びを埋める努力を自然に埋め込む方が、これから大学教育を受講する新入生にとって学ぶ必然性も高いのではないだろうか。新入生は既に「学びの動機づけ」は高いのだから、それに専門的な学びへ誘う入学前教育と補充教育をどうバランスよくミックスさせるか、一層の工夫が求められるように思う。

これらの知見を参考にしながら、編入留学生にとって望ましい留学前教育の実施の方略について、今後具体的に検討していきたい。

付記

本研究は、日本学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)（課題番号 21K02642）による支援を受けています。

参考文献

1) 濱名陽子（2004）「初年次教育と高校・大学の接続」関西国際大学高等教育研究叢書第 5 号、143-154.
2) 濱名陽子（2007）「入学前教育の効果-関西国際大学の事例-」関西国際大学高等教育研究叢書、第 6 号、81-88.
3) ベネッセ連載「高大接続の課題に迫る」第２回入学前教育の課題を考える。「ベネッセ教育総合研究所高等教育研究室長樋口健」 https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/VIEW21_dai_2014Winter-2.pdf
4) 大河内 佳浩他（2012）「e ラーニングを利用した入学前教育と初年次教育への接続: 大学全入時代の入学前教育と初年次教育の在り方を探る」工学教育研究講演会講演論文集 2011(0), 24-25.
5) 鈴木雅之、孫媛（2013）「e ラーニングを利用した入学前教育の効果：早期入学決定者を対象とした英語学習」日本行動計量学会大会抄録集 41(0), 186-189.
6) 陳那森・山下泰生（2017）「大学教育におけるスマートデバイス活用の可能性」『関西国際大学研究紀要』 第 18 号 37-45.
7) 陳那森・山下泰生（2016）「授業外学修におけるスマートデバイスの活用の可能性」『関西国際大学研究紀要』 第 17 号 101-108.
8) 陳那森・山下泰生・窪田八洲洋（2016）「大学教育におけるスマートデバイス活用の現状と課題 ～留学生と日本人学生との比較調査の結果を踏まえて～」日本教育情報学会第 32 回全国大会論文集 37-45.
9) 陳那森・山下泰生・窪田八洲洋（2014）「情報環境の社会的進展を重視したユーザビリティの高い新たな教育環境の可能性に関する提案」日本教育情報学会第 30 回全国大会論文集、168-169.

Abstract

This study clarifies the results of analysis on pre-entrance education-related data (2018-2020) at S University in the Chubu region. As a result, there was a significant difference between the two test results (pre-test and after-test) before and after the pre-entrance education. Based on these results, it becomes clear that pre-entrance education is quite effective in improving national language proficiency. As an issue of pre-entrance education, it is necessary to transform the effects of pre-entrance education into the learning content that invites the start of the coming learning and research from the idea of filling the negative of academic ability. It may be more inevitable for new students to take university education by naturally embedding their efforts to the lacking learning incidentally.